




LES SOEURS FREEGO
LE FIL D'UNE HISTOIRE A PART
フリーゴ姉妹
並外れたブティックの物語

冒険の始まりは、1970年代のサンジェルマン・デ・プレ。「カフェ・ド・フロール」が知識人、「ドラッグストア」がプレイボーイ、「カステル」「アルカザール」や「シェ・レジーヌ」がパーティ好きの溜まり場になる時代でした。

その頃、仲よし姉妹のカティアとナディアは、ブティックの開店準備中でした。思い描いたのは、ふたりが「欲しい服を詰め込んだ、夢のクローゼットのようなお店」。そして1976年、ついにオープン。この夏のパリは猛暑でした。姉妹のブティック「フリーゴ」の名は、片時も手放せなかった冷蔵庫（フランス語の俗語でフリゴ）がヒントに。英語で「Free=自由」「Go=行く」という意味を込めた語呂合わせにもなり、あるがままで気取らない、姉妹の精神を表す名前となりました。

Liberté, audace et idées larges reflètent
l'esprit de la boutique
ブティックに宿る
自由と大胆さ、大きなアイデア

フリーゴ姉妹を特徴づけるのは、軽快さ、洒落と笑い、自由と大胆さ、大きなアイデアが、姉妹の店に宿っています。そのエスプリに惹かれ、芸術、映画、文学、政界、建築、広告など多岐にわたる分野のパーソナリティが自然と集まる場所となりました。「フリーゴ」のイメージを作ったのは、店の常連であり、1950年代に雑誌「ジャルダン・デ・モード」の名物ディレクターでプレタポルテの立役者、また広告エージェンシー「マフィア」の設立者としても知られていたマイメ・アルノダンでした。1998年、フランソワーズ・アヴェリスに付き添われたマイメは、カティアとナディア姉妹が発表したカシミア・コレクションにお墨付きを与えました。また同時期に、デザイン・エージェンシーの「デドワ・エ・アソシエ」が「フリーゴ」のロゴを作り、フォトグラファーのフランソワーズ・ユギエが店のカタログ写真を撮影。「フリーゴ」に来れば、どんな登場人物にもびったりの良い服が見つかった。フランソワ・トリュフォーやベルトラン・ブリエなどの映画の衣装係だったミシェル・セールは、そう回想します。



Une boutique
atypique
類まれな
ブティック

カティアとナディアは、才能を発掘したり、人と人をつなげたり、ジャンルを越境する方法を知っています。そうして時代や階級、流行を超えた「フリーゴ」の核とも呼べるスタイルを提案するのです。姉妹にとって、服とは「自分自身の生き方や人格との邂逅」。服とは明らかな視点であり、ビジョンなのです。ジャーナリストのクロード・ブルエは「ファッションとは服だけではなく、アティチュードにまつわるもの」と言いましたが、フリーゴ姉妹は、その完璧なお手本といえるでしょう。インテリア・デザイナーのジュリオ・ベルナドゥは、ジャコブ通り11番地に宝石箱のような空間を仕上げました。質の良いカシミアやその他の高貴な布の数々が、エレガンスと洗練とともに飾られています。

Un savoir-être
loin du paraître
見かけではない
人生を彩るひらめき

フリーゴ姉妹の作業場は、ジャコブ通り11番地の中庭の奥に隠れています。そこは、ふたりが服のデザインを描いたり、生地を選んだりする創造の拠点。真面目になりすぎず、けれど真剣に取り組む仕事の場。また、顧客らと友情を育む交流の場でもあるのです。喜びに溢れ、長きにわたって気まぐれを共にする人生のコラボレーションが、いつもここから始まります。午後の休憩時間には常連客が立ち寄り、一緒にコーヒーを飲んだり、世間話をしたり、製作途中のクリエイションを覗いたりしながら、意見を交わし、時間をかけて世界の見方を変えていきます。ここで共有されるのは、見かけではない「人生を彩るひらめき」と呼べるものです。

Des collections
d'exception
卓越した
コレクション

「フリーゴ」のコレクションの原材料は、カシミア、コットン、リネン。染めや洗いをかけた、さまざまな布です。コレクションの制作には、モードの職人らとの協働が欠かせません。少しのディテールも妥協せず、手作業による仕上げにこだわる彼女らは、いわばモードの「抵抗者」。その世界は、エンリー・ベグリンがイタリアで職人技と情熱を注ぎ込んで作り上げた「アンリークイール」を連想させます。フリーゴ姉妹は、境界線を越え、才能を探す手間を惜しみません。ふたりは発見を共有し広めることが好きなのです。「私たちが好きな服は、物語を綴っています。エスプリある人々がそうであるように、決して忘れ去られることはないのです」。



探究心と好奇心に溢れたフリーゴ姉妹は、多様なクリエイターをブティックに招き入れます。「フリーゴ」が共鳴したスタイルは「アンリークイール」、ケイシー・ヴィダレン、桜間頼子の「グラスプラム」、マリアルドマン、松下昌宏の「エムズ ブラック」、小池淳司の「クリスチャン ポー」、ダイアン・デ・クラーク、ニコラ・スカリオーネ、ジェーン・ウィーラーなど。希少価値を愛でる、通のためのセレクションです。

フリーゴ姉妹は常にアンテナを張り巡らせ、明日のファッションを作る新たな才能を探し出しています。ふたりは時代を刻んだ数々のクリエイターを見出した庇護者でもありました。姉妹は1977年からマリテ+フランソワ・ブルポーを応援し、「ヴァンティロ」がボナパルト通りに自社店舗を作る前からその製品を扱い、異なるタイプのシルク「ゴ-シルク」の普及を支持しました。サヴェリオ・パラテッラ、「マロ」、「アスベジ」、「ジェントリー・ポルトフィーノ」、「コシノミチコ」、「アレグリ」、ブルネロ クチネリ、ディエゴ・デッラ・ヴァッレ、伝説的な「カーハート」。これらすべてが、「フリーゴ」を通過していったのです。それはひとえに、カティアとナディア姉妹が、あらゆるものから美しく意外な価値、エレガンスを探り当てる慧眼の持ち主だからといえるでしょう。

アンヌ・エヴェイヤール

* 『Le beau pour tous』 Sophie Chappelaine de Montvalon (著者)、Terence Conran (序文)、Editions de l'Iconoclaste、68 €